



明峰

令和8年1月26日

第24号

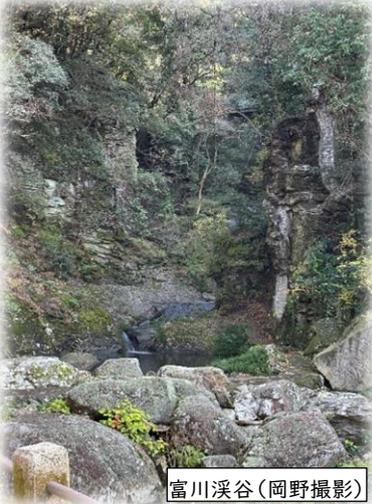
校長 岡野利男

※あつという間に1月も残り1週間を切りました。「1月往ぬる」とは本当によく言ったものだと思います。おそらく多くの方が同様のことを感じられているかと…。

明峰中校区の魅力を探る ①

全国どの学校にも、その校区に、誇るべき自然・歴史・文化はありますが、我が明峰は際立ってその魅力が幅広く、深い。何と言っても、県内唯一の一級河川である本明川の水源の一つ「富川渓谷」を持ちながら、その一方で「新幹線が停まる諫早駅」がある校区です。自然の流れの始まりと人の往来の結び目というコントラストが光ります。

校区の魅力を生徒、保護者の方、本校の先生たちと共有することも校長の仕事の一つと考え、



富川渓谷(岡野撮影)



諫早駅(岡野撮影)

シリーズ展開することにしました。今後、校長としての勤めが終わるまで、気が向いたときに発行する形で続けて参ります(笑)。

さて、シリーズ①は本明川、そしてその水源の一つ富川渓谷です。まずは次のチェックBOXに挑戦!!

- 本明川が、何度も大洪水を起こした河川であることを知っている。
- そのため、国(国土交通大臣)が管理する一級河川であることを知っている。
- 本明川の水源の一つ「富川渓谷」のことを知っている。
- 富川渓谷の崖面や巨岩には、多くの摩崖仏(五百羅漢像)が刻まれていることを知っている。



富川五百羅漢の一つ(岡野撮影)

600名を超える尊い命を奪った、昭和32年7月25日の諫早大水害。この7月25日に犠牲者の冥福を祈る「万灯川まつり」があることから、この水害は知っている人は多いはずです。

しかし、江戸中期の1699年に約500名の被害を出す大洪水があったこと、その翌年には逆に大干ばつとなる自然災害が続いたため、当時の諫早領主が死者供養と泰平祈願を目的に五百羅漢を刻ませたことについて知っている人はどれくらいいるでしょうか。県内随一と評されるほど立派な摩崖仏群、諫早水害史の一端がうかがえるものです。

市街地を流れる本明川は、ゆったりとしていて実に穏やかな川です。河川敷で遊ぶ人々の様子からは氾濫を起こしてきた川とは思えません。



裏山橋から見た本明川(岡野撮影)

しかしながら、本明川は、上流から中流に至るまでが、短く急こう配であるために一気に流れていくこと、そして勾配が緩くなる変化点から市街地が形成されることからどうしても水害が発生しやすくなるのです。

このようなことを知っておくのと、知らないままでは、わがまち・わが故郷への思いが変わってきます。裏面の地形図を見ていただくと、○明峰校区は実に縦長の校区であること ○校区やそのそばを、本明川が流れていることがお分かりいただけるはずです。

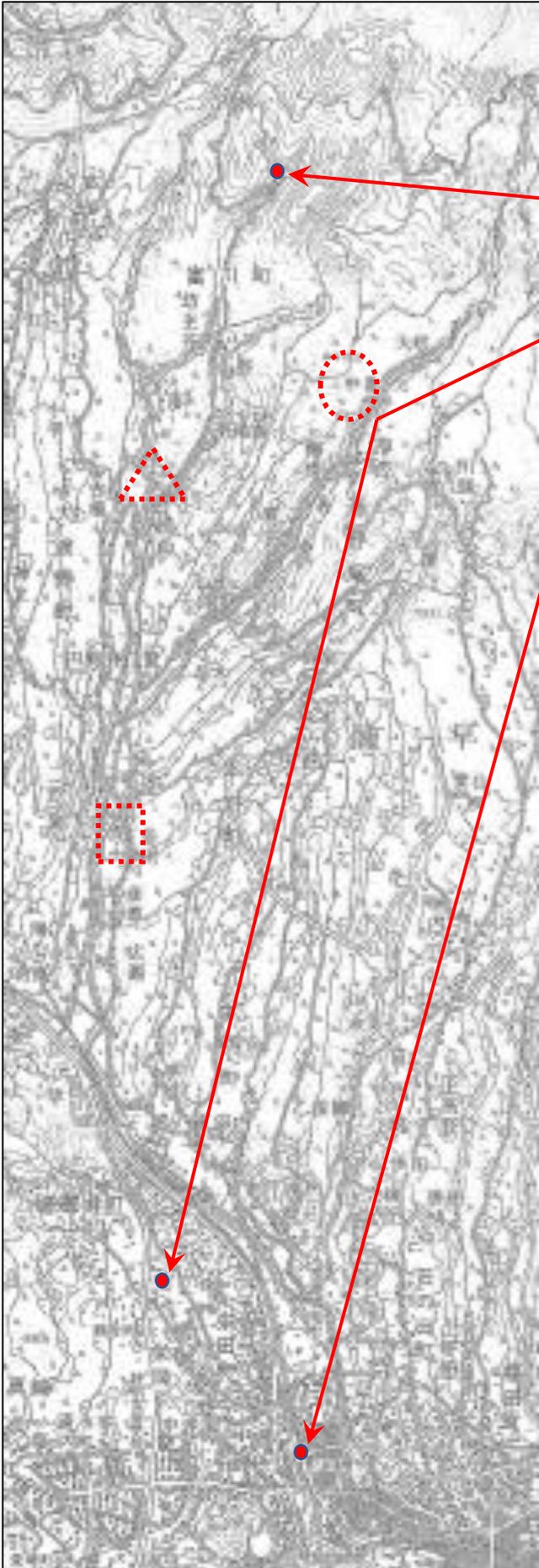
さて、シリーズ①の最後は、シリーズ②につなぐ一枚の写真を。これは、富川渓谷の南西部、建設工事中である本明川ダムを撮影したものです。

ということで、シリーズ②は、本明川ダムの予定でございます! お楽しみに!?



建設工事中の本明川ダム(岡野撮影)

南北になが〜い明峰中校区



明峰中校区のほぼ全てを含んだ(一部、他中学校区が含まれていることをお含み置き願います。)地形図です。実に、南北に縦長な校区であることが分かるかと思います。

第24号に登場した、

○富川溪谷はこの辺り、

○諫早駅はここ、

○そして、明峰中学校はここです。

富川溪谷と明峰中学校の距離は地形図中の直線距離で計測して8kmあまり。実際の道のは相当な距離となるでしょう。明峰中から車で20分近くを要します。

私が、35年前に、新米教師としてこの学校に赴任した頃は、地図中の点線で示した楕円形の辺りから通学してくる生徒がいました。その頃は何も考えていなかったのですが、よくよく考えるとすごいことです…。バスや自家用車での通学だったかとは思いますが、忘れもしないのはちょうど今頃の季節、大雪の中をその子が歩いて登校してきたこと。11時半過ぎに学校に到着したときに、職員室の先生たちが一斉に拍手を贈ったことを覚えています。自然災害でも簡単に臨時休業などなかった時代とは言え、やはり、昔の生徒は強い!!

さて、点線で示した三角形の辺りが、建設中の本明川ダムについて、私が撮影した場所となります。できるだけ、興味をもっていただけるようまた分かりやすい紙面とすべく、現在、鋭意努力中であります。しばらくお待ち願います。

最後に、点線で示した四角形の辺りが、学校だより第7号で紹介した明峰中の前身、本野中学校があった場所。初代校長山口八郎先生の「本野町以北、及び永昌、永昌東地区は、通学距離が今より極端に長くなる。統合不満が完全にはないとは言えない。統合してよかったとすべてが納得できる道は、新中学校の歩み如何にかかっている。」の言葉の重さを視覚的にも捉えられるというものです。